
ひぐらしのなく頃に 反

チャッピー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひぐらしのなく頃に 反

【Zコード】

Z8364M

【作者名】 チャッピー

【あらすじ】

「ひぐらしのなく頃に」の性転換バージョン。内容は、本編を少し変えた物。鬼隠し～暇潰しまで書く。

登場人物

前原圭子
まえはらけいこ
部活メンバー

竜宮レン (りゅうぐうれん)
そのさきみおん
本名
竜宮鈴韻
りゅうぐうれいん
園崎魅音
そのさきみおん
北条沙都史
ほうじょううさとし

古手稜

他の人々
そのさきしあん
園崎詩音
そのさきしおん
鷹野二六
たかのみくく
北条悟子
ほうじょううさとこ
赤坂守
あかさかまもり
園崎竜鬼
あかさかまもり
入江京
いりえきょう
大石藏子
おおいしきわ子
富竹じゅんこ
とみたけ
園崎海斗
そのさきかいと
知恵留伊
ちえりい

登場人物（後書き）

キャラはこんな感じで。性格は、本編でわかります。ちなみに、園崎竜鬼っていうのは、おりょけさんのことです。園崎海斗はあかねさんです。

プロローグ

どうせ引き裂かれる。それよりも、身を引き裂かれないなかつただけ
マシだつたわ。

信じてた……いや、信じてたわよ。今だつて、この瞬間だつ
て……！

薄々は気付いてたわ。信じるのは、認めたくないだけつて。
そんな、アタシに言い聞かせるような涙声が、すついぐく、馬鹿、
らしくてつ……。

機械的に繰り返すそれはおさまつて、とつても静かになつた。
ひぐらしの声、騒がしいわ。ひぐらしの声だけ……。

なのに、彼のそれは、まだ、聞こえてた？ そんなわけ、ない。
そんなわけないわよね。だつて言つのを彼はやめているんだから。
泣いているのはアタシだけ。

彼は、泣いてなかつた。

彼がそれを繰り返し口にしていても、表情も感情もなかつた。
彼が、アタシのために流す涙がないなら、アタシも。

彼に流す涙はいらないはずなのつ！

それなのに……痛み、目を潤ませてしまつのは……何でなの？
もう十分でしょ。

アタシはもう十分に心を痛めてるわ。

……そして、何度も何度も、痛む心を捨てるかどうか迷つたのよ。
でもアタシは頑なに、捨てるこつを拒んだじやないの。
捨てたら、もつともつと楽になれるのに。

そう知つてて、アタシは、信じることを選んだの。

そのつらい苦労は、アタシしかわからないし、アタシしかねぎら
えない。

ねえ、アタシ。

アタシはすくべがんばった。

だから、ね。

もう、楽してもいいんじゃない?

捨てるんじゃないの。

彼と一緒に置いてくの。

そう、花を手向けるように。

さあ、落ち着いて、落ち着いて。
もう、右腕、痺れちゃってるね。
でも、やるのよ、がんばって。
一つ振るたび、忘れて。

親切が嬉しかった。

優しい笑顔が好きだった。

ほっぺをつつつくのが好きだった。

そんな君がはにかむのが好きだった。

これで最後よ。

これで振り下ろせば忘れるんだから。

君に送る……アタシからの、最初で最後の、花束。

もしかして、アタシは君のことが……好きだった。

雑見沢へ帰る

誰かがずっと謝っているの？ 彼は何を謝っているの？ でも、意識的には聞かないことにした。

親類の葬式のため、都會に戻ってきた。久しぶりの都會。先月まで住んでたのに、都會の賑やかさにびっくりしたわね。

いろんな所から聞こえる横断歩道のメロディ。ビルの建ち並び、高速道路があちらこちらに曲がりくねっている。駅前の選舉の演説も今となつては懐かしく思える。

今住む土地はそんな賑やかさはないわ。あるのは、せみの鳴き声や、清流のせせらぎ。そして、ひぐらしの声。そんな静けさに寂しさじやなくて、安らぎが感じじるよくなつたのは最近。

でもこの土地には本当に何もない。

気がきくハンバーガー屋さんや自動販売機。レコード屋やレストランもない。ゲームセンターだってないし、アイスクリーミング屋さんなんてもつてのほか。

最寄りの町に行けばあるけど。なにせ、自転車で一時間よ。でもそれが不便で感じる必要はなかつた。

前は、レコード屋やゲームセンター、アイスクリーミングやもあつたけど、利用してなかつた。アイスクリーミング屋は十年も住んで一度も立ち寄つたことはなかつたわ。

……一度ぐらい食べればよかつた。ちょっと後悔。

まだ誰かが謝つている。何でそんなに謝つてるの？ こんなに謝つてるんだから許せばいいのに。

謝られていく人にはタシは少し苛立つた。

彼だつてもう謝らなくてもいいの。」

それでも彼は謝った。謝り続ける。

ねえ、謝られてる誰かさん。もう許してあげてよ。謝つて許されない罪なんてないわ。

もし、取り返しがつかなかつたら？ とつても深い罪を犯したら？ それも許してあげるべき。彼が謝つてもどうにもならないんだから。

それでも彼は謝り続ける。

ねえ、もう許してよ。こんなにもみじめな声で謝つてているんだから。

「圭子、もうそろそろ着くぞ」

父に言われ、まじろみの中から田を覚ました。

列車が終点に着いたみたい。

新幹線、電車を次々と乗り継いで数時間。窓から見る風景は、あの都会と同じ国であることを、いや、同じ時代であることを疑わせた。

ここから山道をはしつた。

ひとつ木が生い茂る間を通つたその先に、今のアタシの住む村、離見沢があつた。

夏だとこゝのこゝ、朝の空氣はとても冷たい。でも、肺いっぱいにため込めるほど澄んでいた。

窓を開けると一面に広がる緑、緑。

お隣さんはすーと向こゝ。だから、こゝの景色はアタシ一人しか見てないとと思う。

もう一回。深く深呼吸。

適当に、今日の用意をして階段を下りる。

リビングには、お母さんだけ。お父さんは、朝まで仕事を頑張つてるんだ。

お父さんは画家という風変わりな仕事をしている。この仕事がまた香氣なものなの。好きなときに、起きて、寝て、仕事して。なんか楽そうだったから将来、画家になりたい、つていったら、お父さんはすつこく喜んだ。……乐そつだから、なんて絶対言えない。お母さんの朝ご飯はすゞい。

「アタシ、運ぶよ。」

食事を並べると、何とも典型的な朝ご飯。のりに漬物に生卵、焼き魚。我の母は恐ろしい……！

スケジューールとは縁のないお父さんとは反対で、ソツがない。

鼻歌を歌つて、味噌汁の鍋を運ぶお母さんは、すこく機嫌そう。「引っ越してきて、早起きするようになつて、偉いわ。」「朝ご飯が食べれないだけよ。」

褒められて、悪っぽく振る舞つた自分がちょっと可愛く見えた。

「お母さん、ご飯、大盛りにして。」

「あら、太るわよ。」

「エネルギーつけときたいの。」

湯気の立つご飯を、のりで一口。その後、ご飯に穴を開けて、そ

の中に生卵を入れる。『ご飯を混ぜてまた一口。時折口に運ぶ漬物も美味しい。

「うん、美味しい。今日も絶好調。

お母さんは、アタシが食べるのを、微笑みながら見ていた。

「圭子が『ご飯を毎日食べるようになつてうれしいわ。』

都会の頃は、ギリギリまで寝ていた。朝ご飯なんて全く食べてなかつた。

お母さんの朝ご飯をボイコットすることができ、塾を強制されたアタシの唯一の反抗だったのかも。

……反抗期、だつたのかな？

全く朝ご飯に手をつけなかつた古い自分。今居たら、ひっぱたいてやるわ。うん。

お母さんは、ひりりと時計を見て、アタシににやにやしながらいつた。

「あー、もうレン君くるんじやない？ 早く早く。」

お母さんに急かされ、最後の味噌汁を喉に流し込む。そして、玄関に急ぐ。

レンっていっては、アタシのクラスメート。世話を焼くのが好きで、いつもアタシを迎えてくれる。お母さんは、男の子と登校というシチュエーションを楽しんでいたみたいだつた。

アタシとしても、思春期時期の男の子と行くのは恥ずかしい、といふかなんていうか。まあ、いつもして律儀に待つてくれるんだから、待たせるのは悪い。

……ていうか何時から待つてゐるのかな？

「レン君にお漬物ありがとーって伝えといて！」

そういえば今日の漬物、ちょっと違つたわね。もつと味わえばよかつた。

「うん、わかつたー！ 伝えとくー！」

「圭子ちゃん！ おはよーっ！」

爽やかな朝にぴったりの快活な挨拶が聞こえてきた。

「レン、早いわね。たまにはのんびり遅刻してもいいよ。」

「寝坊したら圭子ちゃん待たせちゃうよ。」

やさしいヤツ。ほんといい子ね。

「その時は置いてくよ。」

「圭子ちゃん冷たい。いつも待ってるのに……。」

「さくさく置いてく。きつきり置いてく。」

「どうして冷たいんだろ。だろ？」

レンが困った表情を見せる。人の言葉にすぐ反応する、楽しいヤツ。

「嘘よ。ちゃんと待ってるから。」

その一言で、レンの緊張の糸をほじこたみたい。あら、顔が真っ赤ね。

「わ、そ、その……ありがと……。」

「ちゃんと、レンが来るまで。ずっと、ずっと。」

「あああ、ず、ずつと……。」

レンが顔を真っ赤にして湯気を出しながらショート。レンはいつも系のは弱いらしい。これだけからかう価値がある人って少ないかも。

「レンって、ロマンスものの小説つて読む？」

「え、ええつと、ない……かな。」

その様子から、読みたいけど、恥ずかしくて読めないみたいね。読んだら大変。赤面してぶつ倒れるのがきっとオチね。

「あ、そうだ。お漬物ありがとつてお母さんが言つてたよ。」

「どういたしまして。どうだった？ しょっぱくなかった？」

別にしょっぱくない。むしろあつさつしたのがめだつてるわ。」

「いつもアタシは素直に「おいしい」って言えないのね。

「その前に。あれ漬けたのってレン？ それともレンのお母さん？」

「え？ 何でそんなこときくのかな？ お、おいしくなかつた…？」

「今度はあるおろわたわた。

「レン？ レンのお母さん？ どつち？」

「何で作った人聞くの？ 圭子ちゃん？」

「どつちが作ったかで感想が全く違うの。」

「ええつ……？」

料理の過程を思い出しながら調味料の分量を指折りしながら思い出している。別にいじめてないんだけど。ま、からかわずにいれ

ないの。女が男いじめて……何やつてんのかしら、アタシ。

レンは、何回か言葉を飲み込んでおずおずと口を開けた。

「ぼ、僕だけ……。」

「すつ」ぐれいしい。」「

「え？」

「前回と続いてなかなかだつたよ。お米との相性は最高だつたわ。」

「また真つ赤になる。ぼーつとした感じで。つぐづくからかいがいのある子ね……。」

レンが悪女にでも引っかかるないことを願わなきや。がんばつてね、レン。アタシが人に並べるぐらい鍛えてあげるわ！ なんて勝手に決心する。

「行こうー。レン！ 魅音を待たせるといからー。」

「このままずーっとぼーつとしてそなレンを正気に戻して、アタシ達は学校へ走つた。

「このすぐ真つ赤になつてぼーつとする子は竜宮レン。まだ知り合つて一月も経つてないけど、変わつてるのは名前だけじゃないのはよくわかる。

「魅い君！ おっはよー！」

次の待ち合わせ場所で、アタシ達を待つ人が見えてきた。こっち

に気づいたのか、手を振つてくる。

「おう！ 来た来た。おっせーよ、おめーら。」

「遅いのはあんたでしょ。魅音。」

レンの律儀さと正反対でマイペースなヤツ。

「こいつは園崎魅音。一応一番の上級生でクラスのリーダー。」

「よう。レン。そして圭子！ 何年ぶりだよ？」

「一日しか休んでないじゃない！」

「ああ。そうか？ 前はこんなにチビだつたのになあ。」

魅音が地上一メートル離した所に手が！

「アタシって、引っ越ししたの、先月よね？」

「こんなに立派になりやがつて。いい男を探せよ。」

「丁寧にハンカチまで出しての泣き真似。朝から土曜八時のノリ？！」

「へえ、苦労したのつて誰かしら？」

「可愛くなりやがつて。ブラ、新しいサイズ買つただろ。」

「買つてないわよ。」

「いいや、買つたな。先週お袋さんと買つただろ？」

「あれはお母さんが……つてなんでそんなんしつてんの？」

アタシの問いに、魅音がちちつちと指を振つてみせる。なんの真似よ。

「おいおい。園崎魅音の情報収集能力をなめんなよ。圭子の昨日の夕食からスリーサイズまでお見通しだからなあ？ レン。圭子のスリーサイズ。気になるだろ？」

「わわつ、す、すりーさーず……。」

「ちょ！ 魅音やめてよー。レンも赤くなるなーーー。」

「どうだつたよ。都会は。」

下品モードから復帰した魅音が、ようやくまともな話題へ変えてくれた。

「葬式に行つただけよ。騒がしかつたわ。」

「で、見つけたか！ 賴んだヤツ！」

「だあかあらあ。アタシは葬式に行つただけ！　おもひや屋に行く暇はないの！」

「あつちつち。おもひや屋とボビーショップは別だぜ。特に洋モノはこつちじやねえからな。」

「魅い君。またゲームの話？」

レンが軽く笑うと魅音が得意げに笑つて見せた。

「そ！　圭子に洋ゲーのカタログを持ってきてほしかつたんだがなあ。」

洋ゲーつてのは輸入ゲームの略。こつこつといかにもマニアックっぽい。

「通販で取り寄せればいいんぢゃないの？」

「ま、そうするか。またブレイングの熱いのを入荷するからなあ！　レン、覚悟してろよお！」

「え、わ、わかりやすいゲームがいいかな、僕……。」

魅音は、カードゲームやボードゲームなどの愛好家で、いろんなゲームを集めてるらしい。レンによれば、魅音の部屋は何十種類もゲームの博物館つて。

「面白いゲームならアタシにもやらせてよ。」

「お。いいぜ！　圭子がよければだけどな。俺らのレベルは高いぜ！」

「上等じゃない。アタシだつて。負けるつもつは一つもないから！」

「やつたーじやあ圭子ちゃんも一緒に遊ぶんだ！」

レンが全身で喜びを表してアタシと魅音の顔を見比べている。魅音がグーに親指を立てるとレンは今より倍に表情を明るくした。

「やつたあ！　圭子ちゃんが一緒なんだ！　わーいわーい！」

レンはやたら嬉しそうだった。これだけ親しそうなのに、まだ転校して一月を経つてない。転校生のアタシにいろいろ気遣ってくれるのがよくわかる。だから、アタシもみんながたくさん気を遣つてくれないよう、溶け込む努力をしなきやつて思つ。自分でも馴れ馴れしい、つて思うくらいの方が、アタシにはよかつた。

沙都史＆稜 登場

「」の雑見沢の学校はほんとに小さい。クラスは、学年がほとんどばらばら。そんなばらばらの30人が同じクラスで勉強している。昔は、もつと大きかつたつて。だけど何かの理由で合同教室になり、それが根付いたと。

初めは面食らつたけど、今ではすっかり馴染んじやつた。朝の子供のはしゃぎ回る声。学校じゃなくて、幼稚園みたいだつた。でも、そんな賑やかさも、心地いいものなのね。

それまで先頭を歩く魅音が、レディファースト、といい、先をにやにやして譲る。

教室の引き戸。

アタシが先に教室に入れと？

何度も引っかかるほど、アタシは馬鹿じゃない……！

「レディファーストなんて。言い方が上手ね。いいわ。」

お手並み拝見。魅音はにやりと笑う。

「どうしたのかな？」

「レン。下がつて！ あの子よ……。」

「！ 沙都史くん？」

あの子、つて言つるのは北条沙都史。年齢をわきまえず、アタシに刃向かう『ガキ』よ。口調がむかつくけど、それで腹を立てちゃ大人げない。

問題は別にある。

「見え見えのワナね。引き戸の上の黒板消し……見え見えよ！ 沙都史。」

引き戸の奥で、くぐもつた笑いが聞こえる。

「見事だな！ 今回は、圭子の勝ちかあ？」

「いや。これで終わらないわ！ 絶対！」

「あははー。がんばれ！ 圭子ちゃん！ 冷静になるか、真面目か、

情熱的、冗談っぽく？ よく考えてね！
んんっ。そうねえ……。

転校初日から壮絶なトラップコンボに見舞われたアタシだからこそ、慎重になれる。

複数のワナを多彩に仕掛け、本命のワナへ誘う誘導、連續ヒットの連鎖系トラップ、等。しかも狡猾なのは、やたら連発しないこと。忘れた時には、彼のトラップの術中にいる！

油断も隙もない、恐ろしい子ね。

「見たところ、黒板消しには、何も入れてないみたいね。」

初めてのトラップは、黒板消しに石が入つてあるもので打ち所次第で……。

「じゃあじゃあ、ガラガラって開けて落とせば？」

「それよ！」

沙都史の狙いはそれ。アタシに上を向かせて、引き戸に手をかけさせる。

引き戸の手をかける部分は、ガムテープと画鋲で、恐ろしいトラップだった。攻撃力最大。そのワナを偽装するため黒板消しを見せつけている……！

「見事よ！ だけど所詮はガ・キ。浅知恵なの！」

勝利だけを心に見て、ドアを開け、奥へ踏み込む。

足首の違和感。それは、縄跳びを足に引っかけた感覚。やられた後にはもう遅い……！

美しい角度で転ぶアタシ。

「圭子！！ 避けろっ！！」

魅音の鋭い声に、アタシはぎりぎりで身をひねって床に倒れ込む。

「いい……たあ！？」

アタシの倒れる予想地点に墨汁が満たされたすずりが置かれている……！ クリティカルした時のアタシ……。それは、とてつもなく

ひどい光景だわ！」

「おはよつゝじぞこます！――圭子さんほ朝から元気ですねえ――」
不様なアタシを小馬鹿にするような声が迎える。

「また腕をあげて、ひどいトラップね！ 沙都史――」

「私は何かわからないです。朝からついてない女性――」

「あんたあ――……いつ、いたつたつ――」

不覚に、転んだ時、腰をひねつたらしい。……すずりと比べれば……す、と、小さな手がアタシの頭にのる。

「圭子。痛いの痛いの飛んでいけ。」

小ちなかわいいおててが、アタシの頭をほふほふと撫でる。

「腰とか挫かなかつた？ じうして撫でれば消えていくよ……」

腰なら頭を撫でても意味ない……と思つたけど、つっこまない。

こうじうのは、行為じやなくて優しさが大事だもんね。

「うん。ありがと。稜君のおかげで痛みがひいたよ。」

「わ！ 稜君、おはよおーう！」

「レンにおはよつゝ。みんなこもおはよつゝ。」

稜君は、かわいらしく、ペコペコとかわいらしく頭を下げた。つられてアタシ達もペコリ。

「稜君は天使よ……。それに比べて沙都史――」

ぎつと睨むと、沙都史は目をそらして口笛を吹く。

「沙都史はいい子です。」

「いい子はこんなワナしないわよ――」

「言ひがかりですよ――！ 証拠もなにも……ふわあ――」

アタシは、沙都史の襟首を掴みあげる。じうするといだすら好きの猫よ。

でも、この子は猫より悪い――

「ゴ・メ・ン・ナ・サ・イつて言になさ――……言わないとも……」

アタシは、右手で「ゴピンを作り、ふるふると振るわせながら沙都史のおでこに近づける。

「ほ、暴力は違法行為です――！ 証拠もなし――」

「覚悟しなさい！ そうだあ、ここの前、デコピンをぶつけたりベーヤ板が割れたなあ……！」

「ひいひいひい……。極悪女……。」

「変な」と言わない……。」

小さな手が、服の裾を引っ張る。

「圭子が一日休んだから沙都史は寂しかったんだよ。」

稜君つて……そんな言われ方したら、何も言えないわよ……。半べそをかいた、デコピンにおびえるいたずら猫を解放する。

「あああああああん！！ 悔しくない！！つあああああん！！」

「泣いちゃだめ、沙都史。ふあいと、おー。」

いたずら盛りの友人の頭を、そつと稜君は撫でる。この一人が同い年なのを疑う。

……沙都史は、稜君の爪のアカを煎じて一リットルぐらい飲むべきだよ。

「今度はすつこワナを仕掛けよ。」
……ちよつとストップ……。

そうやる光景を、レンがうつとりした表情で見ていた。

「あう～。かあいい～ねえ～。」

「持ち帰り禁止だぞ。」

「ええ～。……こんなにかあいいのに～。」

「どんなにかあいくてもだめだ。」

「ちょっと、ちょっとだけだよお～。あう～……。」

レンが、可愛らしい顔で飛んでもないことを口走っている。

魅音によると……レンは可愛いものにめっぽつ弱いらしく、しかもそれをお持ち帰りしてしまつらじこ。

物でも人でも……！

「物も人もやばいわよ。諦めなさい。」

「じゃあ、見るだけ。見るだけだよ。……それならいいよね。ねつ？」

悔し泣きする沙都史にレンはうつとつ。

もしもこの離見沢で男子児童誘拐事件が起つたら、アタシは何であろうと、レンを通報しなきや。許してね。差し入れはかあいいものたくさん持つて行くわ……！

「おい！ てめーら！ 早く片付けろ！ 沙都史、すずりお前のだろ！」

魅音の一聲で一気に場の空気が戻る。すずりより、引き戻の画鋲はやばい！！ それは、アタシが刺さらないようじる。仕掛けたのは沙都史でも、後片付けはみんなで。

先生が来たときはつい今あつた光景はきれいに片付けられていた。

「おう！ 間に合つたな。きりーつ！ きょつけー！！」

クラス委員長の魅音が号令をかける。

圭子の固有結界について、意見があつたらなにかください。

著作何とかになりそだから、作者の覚えている限りで書きます。

こここの学校は、クラスは一つだし、学年もばらばら。だから、先生は、当然低学年の方へ向かう。

ほとんど上級生、アタシとレン、魅音は、自習みたいなカンジ。彼らは低学年を教えることが多かつたみたいで、二人の勉強の進行は、アタシと比べて大きく遅れていた。

「圭子ちゃんの教え方はわかりやすいよ。ありがとう。」

レンが、チェック箇所をマークで塗る。

そして、やる気なさそうに、アタシはいすにもたれかかり、頭を後ろに反らす。

「教えてたら、アタシってこんなに理解してないんだーって思つて。自信なくなるわ。」

「人に教えるには、人より三倍理解しろっていうしな。圭子は俺たちに教えていることで復習になんだよ。」

逆にこつちはめちゃくちゃ。あんた、アタシより学年上じやない！「まー。俺は高校に行くつもりもねーし。そこそこ出来てりや十分。適當でいいだろ。」

「み、魅い君、そんなこと言わないでよ。圭子ちゃんがせつかく教えてくれてるのに。」

あ、チャンス。

アタシは、うつとりした表情で、レンのほっぺを優しくつつく。

「ありがと。大丈夫よ。レンは先生が高校に行かせてあげる。」

「わ……あ、あう……。」

「朝から夜まで付き合つて、二人きりでプライベートレッスンよ。」

「ふ！ プライベートお……。」

赤くなる。プライベートレッスンでなにを想像したのかしら。実に気になるわ。実況とかしないかしら……？

「受験てのはこんなんを覚えなきやなんねーのか？」

魅音が持っているのは、英語の単語がすみからすみまで書かれている、英和辞書。

「まあ、大体は覚えとかなきやね。テストに出るし。」

「受験するから勉強すんのか？」

「そういふことね。将来役たたないのは承知で。」

「ひつちじやな。出席日数がたりてりや進学できんだ。」

「え？ 1+1級の常識、「受験＝勉強」をあつさり否定された。俺と違つて高校にいくヤツはここには少ないみたいだしな。そんなとこに行くヤツは、興高の学校にいくんだよ。」

「へー。」

「こ」で、チャイムがわりのベルがカラーン、カラーンと鳴る。

「よし！ 弁当タイムだぜー！…！」

「圭子ちゃん。お昼にしょ」

難しい顔をしてたのか、レンが、何倍も明るい笑顔を向ける。

「よし！ いっぱい食べるわよーー！…！」

沙都史と稜君がわッせ、わッせと机を持つてきてくつづける。

「圭子ちゃん。早くー早くー！」

レンが行儀悪く、箸をふつつている。

「圭子さんの昼食は、寂しくパンの耳に決まつていてるですよーー！ さあ、恥を捨てて見せてくださいよ！ ほら、ほらー。」

悪態をつく沙都史も、弁当のふたを開けてない。

年齢も性別も違つ。

でも、仲間なの。

「じゃあ、魅音委員長の命令でいただきます。」

アタシ達の合唱が響く。

「「「「「いつただつきまーす！」」」」

「あらあら、圭子さんのお弁当、奮発しますねえ？」

「あらあら、沙都史さんの弁当も奮発してゐるじゃないですか？」

煮

物がいい感じで、美味ですよ。」

みんなのお弁当を、勝手につつづく。

初めは、男だらけの昼食にドキドキしたんだけど、魅音に見透かされ、すく離し立てられたつ。

そして努力（？）して、誰のお弁当でもつづけることに成功。ほかに女の子はいるんだけど、年が離れすぎてアタシを怖がって近づかない。

まあ、大体そんなもんよ。

年上は小さい子から見れば、近寄りがたい。

逆にこっちの男の子は気が楽。

「このれんこん、おいしいわ！ 冷めてても味が抜けない。これぞ、お袋の味ね！」

そう言つと、稜君がちょっとびり口元をほころばせる。

「昨日の夕食の残りを、とつておいたんだよ。」

「稜君つてそう言つて得意なんだよな。」

たしかにね。このにんじんの花形も包丁で切つたらしいし。

「裁縫とか、洗濯も上手なんだよ。すくいよね！ すくいよね！」

「稜はいろいろとすくいんですね！」

「いや、アンタが威張ることじやないでしょ。すかさずつつこむ。

「僕より、レンの方が、料理は上手だよ？」

「え、その、えつと……えへ。」

確かに。レンの料理は、なんていうか……心みたいのなのが入ってるんだよね。

「これ、評判よかつたから、また作つてみたんだよ。おいしいかな。

「かなりいい！！ あ、魅音、アンタとりすぎよーー！」

魅音の箸を払いのけ、自分の分確保ー！ ところが、沙都史も乗り出して、めちゃめちゃ。誰も、レンの分を残さうとしないところが、恐ろしい。

「いかが？」
「いいえ、吉子さんとは大違い
です！」

「だから、

—

「だから、アンタが威張る」とじゃないで……。
「お前も圭子とかわんねーだろ。ブロッコリーとカリフラワーの区別、ついたのか?」

月刊 いがのた

さへ！ と、沙都史の顔色が変わる。

わかりますよ！！ わかりますもの！！

そこへよなあ
しゃ
これはなんた

さくれば色まれた
緑の幽面

て、それには、必ず、沙子の、

で、二択を迫るなんて……。

黃色加壓N₂O₂ 紅色加壓N₂O₂

テキおおはあさ

卷之三

卷之三

違う

「あう～～。かあい！ 悔し泣きの沙都史君かあいよー！」

ノリノリノリノリノリノリノリノリノリ

卷之三

卷之三

「…………今、なにがおいたの？」

アタシと魅音は、顔にアザを残して、床に倒れていた。

「…………圭子は、初めてだよな。今日は、初級レベル……」

「……。」

「……、これより上があるって言つの？……」

もしかして、アタシ達、相当な格闘チャンピオンとなつたあいしてる……！？

レンに抱きしめられている沙都史が、レンには見えないよう、ぺろつと舌を出す。くつそー、沙都史め！ レンを上手に使って！－倒れているアタシ達を、稜君が、輝くような笑顔で、頭をなでなっていた……。

部活 ガン牌ジジ抜き！

「さて、諸君！ ただいま前原圭子君を我が部に入れることにしました」と思つたが……なにか異議はあるか？」「ないでーす！」

「圭子さん、実力がどれほどか見せてもらいましょうーー。」

「僕は、早くかかってこい、の状態だよ。」

ちよつと待つて。今どいう状態かさりぱりわかんないんだけど

？ 第一『部活』ってなに？

「我が部はだな。社会のあらゆる状況に応じて対応する…………」

「つまり、みんなでゲームをする部活なんだよ。」

稜君だけが、アタシの問いにあつた答え。

…………いやあ、ゲームして楽しくやればいいわけ。

「そうー、部活第一条！ 沙都史、答える。」

「『こつでも楽しくしなくてはならぬ』ですよー。」

「よろしくー、じゃあ始めるぜー。今日はスタンダードで、えっと

、これだ。ジジ抜き！ー！」

ジジ抜きね。確かにずいぶんスタンダード、って、普通、ババ抜きじゃないかしら。

「魅音さん、バツゲームはなんですか？」

魅音は笑つて、一回転でポーズを決める。

「今日は初心者もいることだしー。今日は、落書きの刑でいいかなあ。」

「え、油性じゃないよね？」

は？ 顔に油性つてー。そんなの、たわしでもおちこぼげじゃない！

ま、まいいわ。アタシの実力見せなきゃねー！

「くくくく。圭子のカードを右から四つ並べ。3、1、11、Q、4、だろ?。」

.....

「ちなみに、ダイヤの3がジジだよ。」

「よつしゃ！
アガリ！」

「私もアガリです！」

「ああ！ れ、レンは、鬼じゃないわよね。」

めんね
れか」
たよね
アカリ

可
一
?

五戦して、全部アタシの負け！？

ありえない、ありえない、ちょっと待つ

「ねえ、これ傷物よね？」
まさか……。

「部活第一 条一『勝つための努力を怠るな』」

一 こまくわせ、せ

この傷で、こいつら、何のカードかわかつているー

「大丈夫だよ。傷は特徴的だから、圭子ちゃんも覚えるから。」

レンの言つ通り。傷はわかりやすい。

仕方ない。
アタシもやるか！

卷之三

「うーん、アタシは8かほしいんだけど?」これか

「ああ、引かない」とはなにもねかりせんよ?」
少郎中の顔色が變つる。(「かこら川かれ立くは」) その父表情!

「 江都史の顔色が変れる いかにも引かれたくない そんな表情 !

「そんな！ 2は、一番わかりにく

ふふ、武器は傷だけじゃないわ。表情。ここに人の感情がでるも
の。

沙都史、
破れたり！

「これが2だな。あれ？ おかしいな……。」

「あれれ。魅い君が間違えるなんて珍しいね。」

「そんなはずは……、！ まさか、圭子！ お前…」

「あはははー！ そうよ。」

『傷』の付け方はいろいろある。そう、彼らの手段は、爪が多い。

だから付けてあげたの。アタシの『爪』でね！

「ダイヤの2を偽装！？ あじなまねをする人ですね……！」

「矢報いた圭子だね。パチパチ。」

稜君が、指で拍手する。

「まあ、負けは確定だけど。魅音から一本とれたから。満足かしら。あはは。」

「おい、圭子。お前、負けは嫌だろ。」

「そりやそりや。みうみう。」

魅音がまたにせりと笑う。

「騎打ちしようぜ。俺と。」

「一騎打ちですか？ ルールを説明しなさい。」

かかつたわね。優勝者を負かしたことで出でてくるチャンス。
逆転なら今しかない。

魅音はカードをわざとらしくアタシに見せつける。……ちょっと
むかつぐ。

「俺の持つている一枚のカード。右か左、どちらがジヨーカーか当
てたら、圭子の勝ち！ 負けたら あ……、ぐぐつ。」

「いいわよ。でも、魅音がしこんだの？ もし、一枚とも普通の力
一ドかもしれないじゃない。そしたら……。」

「じゃあ、圭子が選んだらもう一枚も公開、これでいいだろ？」
傍観者となつた3人の、つばを飲み込む音がはつきり聞こえた。

「やつてやるわ、いいわよ。」

戦いのコングが、鳴る。

まずすることに、アタシの知つてゐる知識とカードの
特徴と照らし、検索。

右のカードは、目立つた傷がなく、わからない。

「慎重にね。がんばつて！ 圭子ちゃん！」

レンが応援してくれる。そして、レンの応援がアタシの落ち着き
を取り戻してくれる。

「ありがと。逆転のチャンスだもの！」

ええつと、左はいくらか、自分の検索にヒットするといふがある
気がしなくもない。んん~？

「あ、あのカード……！」

沙都史の些細な言葉ものがさず。それに反応して、魅音が舌打ち
つと。

は~。なるほど~。

アタシはわからないけど、このカードは、一人の反応からしてさ

つきのゲームに出てたらしい。

ゲームにでている、イコールジョーカーではない？

「んー？ 圭子は右が怪しいと思うか。じゃ、右にするか？」

魅音が右のカードを強調するため、右の手を前に出す。さて、悩むものね。

少し思考して見ましょうか。

左がジョーカーではないと知つてしまつた以上、右がジョーカーでないとおかしい。魅音に言われるまでもない。右が怪しいわ。でも沙都史の反応だけで決めるのは早い気が……。なにかはつきりするものがほしい。

……あ。思い出した！

左のカード。あれは…………やつぱり、クローバーの7！！

「うん。クローバーの7、だね。」

レンの言葉の通り、そうすると、右がジョーカー！ 勝つた！ 右のカードに伸ばす手を、ぴたりと止める。なるほど。口から思わず笑いが漏れる。

「え、なんですか？ だつて左がジョーカーつて、」

「しー、だよ。」

魅音は、今の状況を楽しんでいるようだ。そりや楽しいわよ。

「へえ、圭子はどうして、『右がジョーカーじゃない』って思つんだよ？」

魅音の発言が、アタシを除く部員を困惑させる。魅音、アタシを試している？

「アタシが今言えるのは、『右はジョーカーかわからぬ』つてこと、そして、『左はクローバーの7』つてコトだけよ。」

「どーしてですか！ 左がクローバーの7、右がジョーカーじゃないんですか！？ そういう約束でしちゃう？」

「ええ、そういうことでしちゃう。」

「圭子は勘がいいね。」

「え、稜君、どういひ……。」

「一ゆ一時は、かつこつけてためるのがいいわ。せーの、
「クローバーのフツてのは、アタシが沙都史のカードと一緒にゲー
ム中捨てたんだよ！」「

き、きまつたあ……。

場は騒然！ 3人がカードの山を探るが、ぐちゅぐちゅのカード
に紛れた真偽はわからない。

「つ・ま・り 魅音！ あんた、クローバーのカードを、カード
に重ねてるでしょ。」

「じゃあ、なにかのカードをクローバーのフに見せかけている？」「
わかる。魅音の顔に、『にやけ』だけでは隠せていない、『焦り』
が見える。おそらく、アタシの推理は、あつている！

「ジョーカーは左よお……！」

熱い、一言。

この瞬間は、ダイヤモンドよりも、深い価値がある。
みんなが、アタシの勝ちを確信してゐる。

勝つた。

「部長として、俺も数々のプレイを見たが、圭子。お前はベストだ。
ベストオブベストオブベストオオ！！！！！！！」

魅音なりの賛辞なんでしょう。両手のカードをこぼした。やつた
……。

「すごいすごい。ぱちぱちぱち。」

稜君がアタシの周りを嬉しそうにぐるぐる回る。

「え……あ、あれ？」

「なーによおー？ インチキなんてしてないわよ。アタシは堂々と
ねえ？」

「稜のこの動きは……人をばかにするときだけにするんです……。
え？ ばかに……？」

その時、短い悲鳴を上げたのは、レンだった。

「みんな」とかで……。

「 わあがだよ!!。お前は頭が良いからな。 」 今までよんでもくれる
と感つたよ。…… くひくひく。

ヤの2!
一

前原圭子を、我が部への入部を許可するつー！」

負けた絶望にうちひしがれているアタシにお構いなしに、アタシの入部を喜ぶみんな。……くうーつ、こいつら！ 知つてたなあ！ 「あははは！ 魅い君がカードいじり始めた時、始まるんだあつて じきじきしうやつたよお！」

吉五さん　めでやぐぢや懸かよいかでしたから　右の

「圭子さん、めちゃくちゃ勘がよい方でしたから、右のカードを伸ばした時、はらはらしちゃいましたよ！ もうっ！」
「圭子は凄い人だね。これからも退屈しなさそうですねえうだよ。最近、スペースが欲しかったから。もひとつ楽しませてよー！」

上から、レン、沙都史、稜のコメント。

くつそ、このこと知つてあんだけ演技したんだから、相当役者

ひしおれ
万々シたて
勝を磨いてやるれよ

魁音が 次は目をきかせさせて」 せを見る
……やは

「アシ、見送りでよ。」

「了解です！」

「レン！ なんて書きたい？」

「ちょっと！ 女相手にこれはないでしょ！」

「えつとねえー、アリヤー……。」

「くんな」とダメよ！ ちよ、ま、いやあああつあつああああああ

! ! ! !

帰りの楽しみ

熱かつたあの時は終わって、静かなひととき。
アタシ達の影が長い。

「圭子ちゃん、明日、あいてる？」

レンからのお誘い？ お誘い？ あれ、『一ゆーアプローチはもつと時を選ぶものじゃないの。

「え、ち、違うよ！ そんなんじゃないって！」

レンがあたふたする。

あ、違うんだ。ま、おもしろいから、からかいつかうが。
「なあに？ 違うの？ もう、期待させないでよ……、バカ……。

「え、ええ！…」

「ふつ、だーつはつはつはーー！ 圭子、お前最強！ くつくつくつ。

「え、なに？ なに？」

状況が読めないかわいそうな子犬、って言つたらいい？

謝りますか。

「ごめんね。ウソよ。悪かったわね。」

ちょっとびりの罪悪感を紛らわすように、レンのまつぱをつりつぶ。
かわいいやつね。

「へー、どこからへんからウソだつたんだ？」

「え、落ち込むフリしたとこ。」

「じゃあ、レンから誘われたあの赤面ヤロウは、冗談じゃなく本心
だつたわけだ！ やつぱ男からの誘いは嬉しいもんなんだなー！」

「ち、違うわよー！ もう、魅音ーー！」

こうして、アタシは魅音にいじられ続けた。

「でえ、明日があいてると、なんなの？」

「えっと、何の話？」

話の出発点を忘れるほど、アタシはいじられていたらしく。…く

そ、魅音め。

「あ、ああー、えっとさあ、圭子ちゃんも、まだ離見沢を回れないでしょ？」

そういうえば、なじんだようでなじんでないのね。

学校と、隣町の興富、ぐらい？

「それでね！ でね！ 魅い君と、この村を回りながら圭子ちゃんに村を案内しようつて計画したんだよ。」

魅音が横でニカツと笑っていたのがはつきりとわかった。アタシは、この村にきて、『人の優しさ』つてものを身にしみるほど味わった気がする。嬉しい。ただ、素直にそう思つた。

でも、アタシはまだまだ、素直にはなれないらしい。

「ありがとう。レン、一緒に離見沢を回りましょうね。」

「う、うん。」

「一人でお弁当つついで、手つないで、夕暮れまで歩いて、夜は……。」

「うん。圭子ちゃんが良いならそれで。」

「おい！ 提案したのは俺だぞう！！」

「お弁当、おいしいのにしてね。」

「うん！」

「無視すんなあーーー！ 一人が夜のホテル街に消えていつたって、チラシをくばぐおーー！」

今、レンが、……………殴った？

「じゃーねー！ 圭子ちゃん！」

笑顔で去るレンの後ろ姿。【えええ！

魅音の心配はしておぐ。

「ちよ、大丈夫？」

「あはー、俺はもうダメだなあー。」

「がんばって！ 特訓に特訓で、リベンジするわよー。」
「もう～りい～。圭子が俺のかわりして～。」
「アタシ達って、最強の格闘王と、お付き合いしてます？」

今日は魅音とレンに村の案内をしてもらひつ口。
「お母さんめ、帰りにおつかい頬みやがつて。
少し遅くに寝たから、遅れたらしい。
「おい！ 女の子が先に待つてるのが普通だろ！
「ごめん、昨日ダイエット特集みたいなのがあつたから。あと、
アタシにそういうことは期待しない方がいいわよ～。」
「……魅い君、今来たじやん……。」
「かつかつか……、俺は「密着24時間」見てたけどな
アタシと同類よ。
さて、アタシの目を引いたのは、レンの持つた重そうなスポーツ
バック。
「何が入つてるのかしら？」
「レン、あの後張りつてめちゃくちゃ作つたらしき……。
てゆーことは？
弁当？
「まあまあ！ 大変じやなかつたしね。圭子ちゃん楽しみにしてた
し！ だからね。」
だからつて……そりやねえよ。
もう一度、スポーツバックを眺める。スポーツバックなのは、男
の子だから良いバックをもつてなかつたんだろ？
何キロぐらいかしら？
「たぶん……2キロかな？」
「レン、よつこらしょつて言つてたからな。5キロ。」
「そりやないよ～、よつここしょつとー。」
魅音の意見に賛成。
「お前、これ責任とれよー。
責任つたつて……。」

これをアタシが処理しろって言うの？

「女が男を悲しませるとか、シャレになんねーからなー！」

「わかつたわよー。ちゃんと責任とるからー！」

アタシにできる」と、運動しておなかを減らすこといらしー。

朝日を浴びて、友達と歩きながら優雅にお散歩……。健康的ー。

何しろ「ド」がつくほど田舎だからね。

休日出勤のサラリーマンもいなし。

ホント、良いところね。

しかし、歩いていると少し疑問が浮上する。

「あら、魅音君にレン君！ おとなりは……噂の前原さん？」

すれ違う3人中3人アタシのコトを知っている。……なにこれ。

「はははっ、ちょい悲しいけど、ここ、人が少ねえからな。大体の

人と顔見知りなんだ。」

「つまり、知らない顔が歩いていれば、それは自動的に「前原さん」になるわけ？」

「そーいうことだよ。」

なるほど。つまり、アタシがもし知らない男と楽しく歩いていれば、「前原さんのお嬢さんが、彼氏持ちだ」と村全体に公言することに等しくなる、てことね。

さらに、恐怖の上にまた恐怖が重なる。

「えつと最初に会った人は、野口商店の駄菓子屋のおじちゃん。趣味は、俳句を作ること。市民センターとかでたまに置いてあるよ。」「次の人は、松本さんのとこの長男、祐君。アパレル系の会社に最近雇われてがんばっている、とかいつてたぜ。」

「さつきあつた人は、診療所で働いているみろくさん。趣味は花の写真を撮ることとか。」

あつた人のプロフィールまで覚えている。すげー。

「じゃ、聞いてみましょーか？ ここにいるアタシは誰？」

「えつとねー。前原圭子ちゃん。ちょっと意地悪もするけど、と

つても優しい女の子。」

「転校して三週間。趣味は、Jazzあるじと。この前、母親と「男の良さ」について話し合って、けんかした、とか聞いたんだが。」

「もういい……。」

「男の良さって、結局どういつ結論に？・

「魅音つるとい！・

恐るべき離見沢！

弁当バトル！

「で、ね もうやるやう、お皿にのよ。」

心臓が跳ね上がった……と言つていいくらいだった。

「どうしよ~、食べれる自信なこよ~。」「まー、よし~」

「まー、よし~」

「まー、よし~」

「まー、よし~」

「まー、よし~」

「まー、よし~」

「レン！ どうせ食べるなら、見晴らしのここに立つよ~。」

「うん！ 賛成！」

アタシ達は、場所を移動した。

石の階段を上ったそこには、想像できた風景だった。木造の古い年季の入った神社。でも、とても綺麗に清掃がされてあるみつで、あまりぼろい感じはしなかつた。

「ここはね、古手神社っていうんだよ~。一番ここじの景色がきれいなところかな~！」

「ここは覚えといたまつがいいぜ~。今度ここで村のお祭りがあるからな~！」

ちょっと祭りのシーズンではないわね。

「ホントはな、確か、冬の終わりを喜ぶお祭りってこいつだ。都會かぶれ~」

「セーヒつ。お弁当をひろげて……つと。」

良いにおいがする。彩り、香り、味も完璧なお弁当つてのは、見ただけで普通のお弁当と違うがわかる。さて……これをどうするかなあ。

「景色だけじゃおなかは減らないし……。」

「ここにちわ~。」

あれ、聞いたよつた声？

そこにいたのは、ちょこんと立っていた、稜君と沙都史。なるほど！ 人海戦術！ 魅音、感謝するわ～。

最後のシメはアタシがするわよ！

「ちょっと！ 人様の庭で何していらっしゃるんですか！」

「さあ、ごらんなさいよ！ ビュッフェよ！ ランチ！ レンのお

弁当を、いい景色と一緒に食べるのよ～！」

「でも！ 勝手にゴザしかれても！」

「神社は公共スペースでしょ？ 良いじゃない？」

「そうだよ、沙都史。みんなのおにわだよ。」

「くう～、稜君最高！ 座つて座つて！ 一緒に食べよ～！」

「ちょっと！ 私の分は！」

「なし！ 沙都史の分はゼーんぶアタシが食べる！ 以上よ。」

「なんですか～！ 稜！」

「はい、お箸。」

「いや～、圭子のせるのつまいな～。才能あるわ。」

魅音、ありがと。

「はい、魅い君と稜君お皿。」

「じゃ、みんなでいだくとするか！」

「いっぱい食べなきやくならないね。」

レンが水筒のふたをあける。

今更気づく。このお弁当、五人分を想定して作ってるんだ。それでも多いけど、意味は全く異なることに気づく。

「私のプチトマトオオオ～！」

「アタシはね！ プチトマト大好き人間！ 沙都史なんかにわたすもんですか～！」

「くー、じゃ、唐揚げもらいますよ～～！ あーん！」

「ぐはつ！ 押しのけないでよ～～！」

「襟をつかんでる人に言われたくないです～～！」

激しい戦闘。沙都史がアタシを押しのけ、唐揚げにかぶりつく！

それを、襟を持つて制止する。やつぱ、体の大きさで囲めば、アタシの方が有利！

「ああああああああー。唐揚げ様あー…………。」

「あはははっ！」

一緒に喉にプチトマトを詰めてしまい、もがいている。

レンがおたおたして、それと同時にかいいモード発生。なぜ？
稜君、ご満悦でアタシ達の頭をなでる。

レンをおさえるとともに、温かいまなざしを向けてくれる魅音。

いつもと変わらない温かい、お皿の出来事。
こんな日常が壊れるなんて、考えられない。
壊すものがあるなら、アタシは、どんなことをしても戦つ。
絶対、守るから。

「ふふ、食つた食つたつ。」

ブルーシートに横になると、魅音が、女のくせに、と、ため息をついていた。

悪かつたわね。

「なんですか、日本には食事に感謝する言葉が少ないのでしょう？」
「食事の団らんつーのは、近代になつて取り入れられたからな。」
「昔の人は無言で食事を済ませたらしいから。作る人は寂しかった

「きっと、食べる」とで精一杯だったんですね!」

沙都史、わざわざあなたのHTGを

二路出づる

三九
か騒ぎ如める

「アーティスト」で「アーティスティック」が好かれる。

「おこしょ。」

「< ?」

そういうのは稜君だ。

稜君は、レンに駆け寄つて、ありがとう、おいしい、と、繰り返

して
いた。

…レンの様子が？

卷之三

ハセニバニ

かわいいモード

レンの手にあたるのは、タッパーに詰め込まれたウサギのリン二
それをほおばりながら、稜君がこちらを向く。……怖い！

「お一人には、レンさんから「」を「」ができるでしょ
うか？」

「はえー、沙都史すいぶん強気だなあ？ やつて見せやう？」

ふふん、と鼻で笑う沙都史。

レンの近くまで駆け寄り、こうこうた。

「あ、あの！ ボケも、レンお兄ちゃんのリンゴ、食べたいな！」

沙都史がこちらを見て、ニヤリ、とする。

少爺君の事が、セイ一ツで、一ぬれあるとハなれしあゆ?

負けてられないわね。

碑記

安心して、俺は良い家が作れる
「ホント!!」
上かつた。

「ナニがおのづかせ」

「はあはあ！？」

そこで、魁音の作戦を聞く。なるほど、ここで勝つのは、アタシよ!

レンの隣に座る。そして、優しく抱かれる。

「あはは、ありがと、でも、これほどんど、冷凍食品なんだよ」

.....
o
r

「でも。手作りはあるでしょ。」

「うん、どれかわかる?」

「知ってるわ。これ、よね？」

「あ、当たり、だよ。」

「こまでは魅音に聞いている。ここから、アタシの実力の見せ所。さあ、勝負！」

גָּדוֹלָה עַל־

「どこでねがったの？」

チートマトを口に入れて。ごくつて喉がなる。

「レノのにおしかしたから」

三
四
。

空気が凍り付く。

沙都史が歯をがちがちならし。

魅音がニヤリと笑い

稜君がこちらを見ている。

アーティスト

「わああああああああ！」

「私の負け、なのですか

「妻子がイマニ。

稜君が、リゾゴを見つめている。

それが心配になつたのか、レンが駆け寄る。

「稜君、どうしたの？」
塩水濃すぎた？

「ウサギさんが、かわいそう。助けてあげて?」

「これでもう寂しくないよ？」

「逆転魔王か女!?

「ほりひくほりほく（もく）かでわいこよ」……。」

温かい田舎の中の、樂しい出来事。

レンの「山の日」

思いつきり騒いだ後、解散となり、魅音と別れ、レンと一人だけとなつた。少し、夕日が出てきて、夕方になりつつあるよつだ。：
： 楽しかつたなあ。

「圭子ちゃん？ この後、何か用事ある？」

「え、どこかいぐの？」

「う、うん。ちょっと寄り道だよ。」

まあ、少しごらじいいかな。まだ、遊んでいたいし。
アタシが、別に良いやつていうと、レンは嬉しそうな顔をして、
こいつだよ、と案内した。

葉が生い茂る、木の道を通り抜けると、広い、河原のよつなとこ
ろに出た。

自然だ。すゞく綺麗だ。

そこで、ふと気づいた。この景色に似つかわしくないものが積み
上げられていいる。

車だの、ぼうきだの、タイヤだの、人形だの、おわ！ これなん
か店に置いてるマスコットじゃない！ ガラクタの山、という言
葉が似合ひそうね。

「レン、こいつて……。」

「ここはね！ 山の山なんだよ。」

「え？」

「あ、新しい山ができるの、わくわく、わくわく。」

「あ、ちょ！」

レンは、軽い足取りで、ガラクタの山をかけ上つたり、下つたり。
じゅわじゅわ、不法投棄されたゴミらしき。
……ひどいなあ。

「レン！ 危ないわよ！」

「だいじょーぶ、だいじょーぶ！　圭子ちゃんはそこで待つて！　都会の子と、田舎の子の差がついたような気がした。レンは体が軽そうだ。

アタシは、とりあえず座れそうな場所を確保した。

「どっこいしょ、と。」

お尻が冷たい。ゴミの上に座るのは良い気分じゃないわ。

「あらら、若いのにそんな言葉つかつていいの？」

後ろから声がした。

女人だつた。帽子を後ろ向きにかぶつて、ノースリーブの紺色のシャツ。カメラを構えて、につこりとしている。活発そうな雰囲気だ。……誰？

「驚かせてごめんね。ちょっと綺麗な被写体がいたもんだから。」

「被写体の人から許可は取つた方が良いと思いますけど。」

「じゃ、一枚いい？」

「嫌です。」

「厳しいー。あはは。」

話していると、何となく気分が落ち着く。大人だ。

活発そつだが、話してみると、落ち着いた人だとわかる。カメラなら、カメラマンかしら。

「おつと、自己紹介してなかつたわ。私は富竹じゅんこ。趣味は、花の撮影。ちなみに椿が好きかな。」

「アタシは、前原圭子です。最近引っ越して来ました。」

「あ、貴方、前原屋敷のお嬢さんね！　よろしくー。今度、モデルになつてよ。綺麗にとるから。」

富竹さんか。雛見沢の住民、ではなさそうね。

富竹さんは、レンに気づいたのか、不思議そうな顔をしてアタシに訪ねてきた。

「彼氏、あんなとこに行かせて良いの？」

「彼氏て……、なんか宝の山らしいです。」

「へえー、なにしてるのかしら。」

「さあ？殺された死体の一部でも探してるんじゃないですか？」
ブラックジョークのつもりだった。でも、富竹さんは、妙に深刻な顔になる。

「……嫌な、事件だつたわね。あと右手、だつけ。」「え？」

「い、今。なんていつた？」

事件？右手？この村で何かあつたわけ？

「あの、なんですか？それ？」

「ん？え、知らない、ええ？」

参つたな、と、富竹さんが、笑つてはぐらかす。アタシに隠していることがある。その事実だけで、アタシは気分が悪くなつた。みんなが、何かを隠している。

レンも、魅音も、沙都史も、稜君も。「なんですか、その『事件』って。」「圭子ちゃん。おわつたよー！」「

「あ、やっぱ。じゃーね！」

「富竹さん！」

あ、情報源が、遠ざがつてしまつた。あーあ。

レンは、かわいらしいクマの人形を抱えていた。

……小学生かつづーの。

「ごめんね。待たせちゃつたね。」

帰り道。アタシの態度が暗いのか、何となく喋らなかつた。それもまた、気分が悪くて。

思い切つて、聞いてみるわ！

「レン、宝の山つて、あそこなんだつたの？」

「宝の山は宝の山だよ。あー！」「ぬう。

「ねえ、さつきの場所で、何かあつたの？」

「ん~、何か？」「

「たとえば、事故とか、殺人と、」

「なかつた。」

「ぴしゃりと言い切られた。

はつきりわかる。拒絶。

この話題には触れない方が良いらしい。

少し、怖い。

「実は、僕、去年引っ越して來たんだ。」

「そ、そうなの？」

「うん！だから、この村の事は詳しくは知らないや。」

「そ、そう。」

結局、何もわからなかつた。

ただ、わかつたのは、みんなが、何かを隠している事だけ。

アタシの心に残つたのは、レンのあの声と、不快な気持ちだけ。

魅音との違和感

部活が終わると、レンはすつ飛んでいった。

帰り道、魅音と一人だけだ。

「あいつが行くところさあ、ゴリゴリなんだよなあ。」

呆れたように魅音が言つ。

アタシも見てびっくりした。

雑木林を抜けたところにある、不法投棄のゴリゴリの数々。

あれを、お持ち帰りいへ、と最近の男の子が飛びかかる光景。

……恐ろしい。

「あつこはな、昔戦争が合つたんだよ。」

「？」

「ダムを役人どもが建てるつづつて、ショベルカーだのダンプだの作業着の男だの、偉そうな奴らがわんさか入つてくるわけ。」

「それで、村で戦つた、ていうヤツ？」

「ビンゴ。もう、俺も暴れ回つた。ま、奴らは村のこともなんにも考えずにダムなんかいやがるから。そんで、村の圧勝！ 完全勝利！ わつはつはーー！」

気持ちよさそうに笑うなあ、こいつ。

確かに、そんなことがあるなんて信じられない。こんな美しい村が沈むなんて、もつたといない。

きっと、村中が一致団結して、戦つたんだろう。

アタシはその中に入つてないから、するりと割り込めるぐりー、

この村になじめればいいなあ。

でも、違和感が拭えない。

この前、富竹さんに聞いた話。

「……嫌な、事件だつたわね。あと右手、だつけ。」

よし。

「魅音。なんか事件とか起きなかつたの?」
ん? と聞き返す。

「たとえば、傷害やたとか、せつじ、」
「なかつた。」

またぴしゃりと、言い切られる。
気持ち悪い。

「んじや! また明日なー!」

「うん、バイバーイ。」

魅音の背中が遠くなる。

綿流し

「綿流し」とは、冬に使つた綿、布団を供養して、川に流すお祭りらしい。針供養みたいなものだろつ。

綿を、重たい鍬でかき回し、綿をちぎつて村人一人一人が川に流す。鍬を持って供養するのは、代々古手家の役割で、古手家頭首の役目。現在は、古手家頭首の後継ぎ、古手稜がこれを行つてている。供養には、神官の格好をし、鍬にはしめ縄、鈴など、かなりの重量。稜の練習は子供用ではあるが餅つきのきねを使って練習しているやう。この作業は、肉体的にも十分負担になる。

我が部活メンバーが古手神社の前に集まる。

今日は綿流しのお祭り。なんかお祭りで騒ぐのは毎年の恒例行事らしく、四凶爆鬪（？）とかいうらしい。ネーミングセンスが無すぎる。

「去年は、おじさんたちに怒られたからね！ あう！」

レンが楽しそうに言つ。そりやこのメンツで回つたりが楽しいだろう。

お、来た来た。

稜君は神官の役をするらしく、和服だ。剣道着のような、袴。

「似合うねえええ！――！」

「レン、落ち着け。裾大丈夫か。ピン預かってるけど。」

「以外と快適だよ。」

「さあ、もう行かないと始まっちゃいますよー。」

お、戦闘開始ね！

始めは、あ、たこやき……。ねこじこよね。

「たこ焼き早食いー。こぐせおめーひーーー。」

威勢のいい返事が響く。

負けないわよ！

「はふふふつははー」

「圭子さんは一気に口に入れるぞですよー。」

「つじわー。(みず)」

「はこはこー。圭子ちりやんー。」

水をのどに流し込む。……窒息するところだったあー。

「次は焼きそばだー。」

「今度はかき氷にしようひー。」

「あ、イカ焼きあるよー。」

「私はお好み焼きをー。」

次から次に騒ぎあくつ、おじさんたちは面白がって、途中からほとんどのお金はチャラだった。

「あ、楽しんでるわねー。」

富竹さんだ。

魅音たちも知つ頃からしゃべ、ペニペニと挨拶する。

「いいわねー若いのは楽しそうだ。」

「富竹さんも一緒に盛り上がりましょう。」

アタシが提案すると、みんなもそうだねそうだね、はーって、と誘う。

富竹さんは、あはは、と軽く笑って、先輩ヨロシク、と来てくれた。

「歓迎しますよー。富竹さんー。」

「魅音さんー。部活の心得を教えましょー。」

「お、そうだな、よしー。我が部はだな。社会のあらゆる状況に応

じて対応する…………」

アタシが入ったときみたいで、思わず顔がほころぶ。

村の悲劇

富竹さんが入つてから、また、騒ぎあがくつた。

銃で景品を落とすやつで、富竹さんとの共同作業で見事！ でつかいクマのぬいぐるみをゲットした。

あ、ぬいぐるみはレンに感謝のしるしついで渡して。魅音にからかわれたな。

いよいよ、このお祭りのメイン。稜君の奉納演舞。

沙都史が、急いで急いで、と稜君を急かす。

部員の晴れ姿をしつかり見届けよう、と、早くから会場で待っていた。

太鼓の音が会場で共鳴する。

それに合わせて、神官姿の稜君がゆっくりとした足取りで出でくる。やつぱりこいつには、歩き方とか決まっているそうだ。やつぱり、田舎独特の「舞」とか言つヤツは、都會では見れない。この感動は、田舎者にはわからないだろう。都會に住んでいるからこそ、この美しさを実感することができる。

ここに引っ越してよかつた。

改めてそう思う。

奉納演舞に集中していたせいか、終わると、仲間とはぐれていた。供養した綿を川に流すお祭り、といつのを思い出し、神社を降りて、河原に出てきた。

蝉の声と、川の流れる音が夏の訪れを感じさせる。

見たことある背が見えた。富竹さんだ。隣に、男の人人がいる。声はかけないほうが多いらしい、と思つたので、無視しようとしたが。

「前原さんだね。もう、奉納演舞は終わつた？」

男の人人が声をかけてきた。一応答える。

「はい。」

「よかつたね、稜君の演舞。」

「そう、ですね。」

一応受け答えの言葉は見つかる。

この男の人は知り合いでもない。村で何度か挨拶しただけだ。なれなれしく話すこの男に、不信感を感じる。

「さあ、今年は、誰が亡くなるかな？」

……え？

亡くなる？

「三六さん、圭子ちゃんは知らないの。やめてよ。」

「ああ、じめんね、ジュンコ。でも、君も気になるだろ。」

何を、話しているのだろう。

今年は、というのなら、毎年、亡くなっている？

「あの、なんのことですか？」

「圭子ちゃん。聞かない方がいいわ。」

確かに。アタシが足を突っ込む話題ではないかもしれない。でも、仲間はずれにされるのは気分が悪かった。ここで、すべてをはつきりさせておきたい。

もう一度、同じ問いを繰り返した。

男は、さすがにアタシが真剣な顔をするので、戸惑つて、アタシに向き直った。

「聞かない方がいいかもよ。」

「かまいません。教えてください。」

男はふつと息を吐き、富竹さんはやれやれ、と後ろを向いてたばこに火をつけた。

一つ約束された。誰にも言ひふらさないと。

「ぐんと頷くと、男は語り始めた。

今から4年前の、今頃。6月の終わり。

この村にダム建設の話が持ちかけられ、村は激しい戦場のようになっていた。

それに終止符を打つ、事件が起こった。

ダムの現場監督が、バラバラにされ殺害された。現在、犯人の一人と思われる作業員が一人、行方不明らしい。

3年前、ダム建設の賛成派だった北条家夫妻が、旅行先で橋から転落。

転落の理由として、柵が古く、たまたま壊れたらしい。

夫の死体は発見されたが、妻は発見されなかつた。

2年前、古手神社の神主の夫妻が死亡。

妻は、病死。夫は、「死んでオヤシロ様のお怒りを鎮めに参ります」という内容の遺書を残し、鬼ヶ淵沼で自殺したと思われる。死体は発見されてない。

1年前。北条沙都史、悟子の義理の母、北条玉枝が撲殺され、死亡。犯人は、自殺したらしい。

そして、その数日後、北条悟子が行方不明。

言う言葉もない。

毎年、誰かが、綿流しの日に、亡くなつている。
異常なほどに寒気を感じる。

「ね？ どう？」

聞いてくる、普通の顔をした男。

異常だ。吹き抜ける風が、さつきは気持ちいいとさえ思つていたのに、今は、気持ち悪いとさえ思つ。
やっぱり、聞かなければよかつたかも知れない。

その後、魅音たちと合流し、適当に話して家に帰つた。

あの男の、淡々と語る、あの話が、頭でぐるぐる回つていた。

次の日。あの話はまだ耳に残っていたけど、いつもと変わらない一日だった。

朝、魅音が遅刻して。

沙都史のトラップに思い切りかかって。

稜くんがなでなで。

レンがお持ちかえりいい！！ みたいな感じで。

昨日の話は、きれいさっぱり忘れよう。

そう決心したのは、部活の途中だった。

その矢先。

「前原さん。お客さんですよ。」

知恵先生から呼ばれる。軽く謝つて、教室を出る。

廊下には、白髪の濃い、女人人がいた。タバコを吸つて、口元を少し緩める。

「前原さんね。初めまして。私は、大石歳子。じゅうじゅう者よ。」

勝手に自己紹介をしていい。わけわかんない。

名刺みたいなものを見せられる。……警察！

「車、クーラーきいてるから。そっちで話しましょ。」

つかつかと歩いていく。大石さんにとりあえずついていく。

車の中は、クーラーがガンガンにきいていて、寒いくらいだった。

「直射日光は、やっぱり避けた方がいいわね。シミができるから。」

車に入つての一言がそれだった。なんていつたらいのかわからず、黙つてしまつ。

「ふふ、大丈夫。取り調べなんかじゃないわ。ちょっと、聞きたいことがあるの。」

聞きたいこと。なに、それは。

…… オヤシロ様の、祟り？

「昨日、富竹さんがお亡くなりになりました。」

「そんな、馬鹿な話、

「のどを搔きむして。爪でがりがりつとやつたらしきわ。富竹さんと昨日、一緒にいたでしょう? なにか、おかしなことはなかった?」

「……………え、特に……………。」

思い出せ、なにかなかつたか?」

富竹さんと合流して、一緒に部活して。奉納演舞のあと、男の人と話した……。

あの話は普通じゃなかつたけど、富竹さん自身は、異常がなかつた、はず。

ただ、アタシが気づかなかつただけ?

夜だつたから、暗くて顔はよくわからなかつた。
どうなの?」

富竹さんは、オヤシロ様の祟りで
ケサレタ?

「わからないなら、もう話はいいみたいね。この話は、あまり村の人にはしないでね。」

「なんで、ですか。」

「この村じや、オヤシロ様の祟りは、公の場には出しづらいやいけないの。特に、あなたのお友達には、絶対にしゃべつちやだめ。」

「だから何で、」

「園崎さん、オヤシロ様の祟りに関わつてゐかもしけないのよ。」

「え?」

話を打ち切られる。一応、といつひとで、電話番号をもうつた。
意味があるかは分からぬが。

「じゃあね。前原さん。」

大石さんは、ふらりと帰つてしまつた。

異常だ。のどを引っ搔くなんて。富竹さんと似ている人じゃないのか？

のどを引っ搔くなら、血で、顔がわからないのではないか。
なにかの間違いじゃないか。

この話を忘れない思いでいいぱいだ。
頭痛がする。

帰り道

帰り、レンと一緒に帰った。

アタシは、あの話の後、ある考えに陥った。

レンたちは、アタシに、オヤシロ様の祟りのことを教えてくれなかつた。

仲間つて、隠し事はないものじゃないの？

ずっとかくしてたのよね。

前から、何かおかしかつたものね。ダムの話も触れたがらなかつたし。

もうこの際、はつきりしてほしい。

レンに聞こう。そう思つて、スカートの裾を握る。

「ね、レン。なにか、隠してない？」

レンは、ぐるりとこちらを向いて、大きく田を見開く。ぐびを横に振る。

しらを切るのかしら。

「何か、隠してるでしょ？」

「なんにもないよ。どーしたの？」

びつくりするほど表情が読めない。

「だからっ！」「レンは、」

「じゃあ、圭子ちゃんはどう？」

レンが近づいて、アタシの田をのぞき込む。

レンの田がはつきり見えた。どろり、と、青いものが。

「圭子ちゃんは隠し事、してるよね。」

「アタシが、いつ、したの、よ。」

声が震える。

レンがにつこり笑う。今となつては、その笑みは、アタシを震え上がらせるだけだ。

「お密さん、圭子ちゃんは、知り合いつて言つたよね。でも、実際

はおばさんだつたでしょ？ 誰かわからない。」「

アタシの嘘が、読まれていた？

そんな、外に出たときは、確かに誰も見ていなかつた……？

「誰？ あの人？」

「だから、知り合い、」

「嘘」

なんなのよ、これ。

さつきまで、明るい顔をしてたレンが、こうやつてアタシを追いつめている。

「圭子ちゃんを心配してるんだ。」

そういうて、アタシの頬を触る。

冷たい手だ。

レンが、もう一度聞いてくる。

ホントのことをしゃべらうか。

でも、アタシは、しゃべりたくない。怖い。

「レンたちの」とじや、ないから

「嘘つくなつ……！」

レンが、アタシの、ほっぺを、叩いた？

右頬が、熱い。

レンが、まるで、獲物を狙う鷹の様に、目を鋭く光らせて。

こいつは、誰？

レン、じゃない。

レンだけど、レンじゃない、誰か。

アタシは今。何を見ているの？

「僕だつて、隠し事ぐらうするよ。ね？」

レンが笑っている。

さつきとは、顔が違う。レンに戻つた。

息が上がる。何なのよ。レンが、怖い。レンは、先に歩いていつてしまつた。彼が見えなくなるまで、アタシは、地面に座り込んでいて、さつさまでの出来事を思い出していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8364m/>

ひぐらしのなく頃に 反

2011年6月25日22時55分発行